



Data

監督・脚本・VFX: 山崎貴
原作: 三田紀房『アルキメデスの大戦』(講談社「ヤングマガジン」連載)
出演: 菅田将暉/柄本佑/浜辺美波
/笑福亭鶴瓶/小林克也/
小日向文世/國村隼/橋爪
功/田中泯/館ひろし

👁️👁️ みどころ

『永遠の0』(13年)で「ゼロ戦もの」に挑戦した山崎貴監督が、念願の「大和もの」に挑戦!これは、「数学で戦争を止めようとした男の物語」だが、あなたは「アルキメデスの原理」をしっかりと覚えている?

今は、最新鋭ステルス戦闘機F35一機が約100億円だが、1930年代に世界一の巨大戦艦を建造する費用はHow much?その見積額が、飛行甲板だけで済む空母より安い?そんなバカな!そりゃ、きっと数字上のインチキ!航空主兵主義で新戦艦建造反対派の論客、山本五十六少将はそう直感したが、さてその立証は?

本作前半にみる、“100人に1人の天才”と呼ばれた東京帝大の数学者、権直の奮闘ぶりは面白いが、本作の真骨頂は数字の上では完全に新型戦艦建造計画会議で敗北した戦艦建造推進派の平山忠道・造船中將の含蓄深いセリフにある。それをしっかりとかみしめながら、本作冒頭の山崎流CGで描かれる戦艦大和の沈没シーンをしっかりと味わいたい。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■ゼロ戦から戦艦大和へ!山崎貴監督の挑戦は?■□■

2013年には山崎貴監督の『永遠の0』(13年)(『シネマ31』132頁)と宮崎駿監督の『風立ちぬ』(13年)(『シネマ31』140頁)が公開された。両者とも「ゼロ戦もの」だが、百田尚樹の原作については大ヒットしていたものの賛否両論がハッキリわかっていたから、映画についても一部に「戦争賛美!」と批判する意見も出ていた。宮崎駿監督は「戦闘機は大好きだが、戦争は大嫌い!」と公言していたが、本作のパンフレットによると、

山崎貴監督も「子供のころから戦艦大和や零戦が好きだった」と語り、「いつかそれらを題材にした作品を撮りたいと思っていた」そうだ。そして、「戦艦大和の映画と言うと、たいてい船が沈められるときに何があったかというような話になる。それとは違う、新しい切り口で撮りたいとずっと思っていたときに出会ったのが、原作『アルキメデスの大戦』でした。こんな切り口があるんだとワクワクしました」と語っているから、なるほど、なるほど。しかして、なぜ『アルキメデスの大戦』が「大和もの」なの？

「戦艦大和」をテーマにした映画はたくさんあるが、直近で最も有名な作品が戦後60年となる2005年に公開された『男たちの大和/YAMATO』(05年) (『シネマ9』24頁) だった。同作に感動した私はわざわざ尾道に作られた実寸大のロケセットを見学し、そこで撮った写真を『シネマ9』の表紙写真に使ったほどだ。私はマンガの世界は全く知らなかったが、三田紀房の原作マンガである『アルキメデスの大戦』は、数学者を主人公に、戦争を舞台にした物語では前例のない「数学的見地」から第二次世界大戦を描いたもの。子供の頃に習った「アルキメデスの原理」は、ウィキペディアで確認すると、「流体中の物体は、その物体が押しつけている流体の重さ(重量)と同じ大きさで上向きの浮力を受ける」というものだが、数学が苦手な私は実は今でもその中身がよくわかっていない。しかして、なぜ、そういう視点から「戦艦大和」を描けるの・・・？

■□■甲斐キャノンもすごいが、帝大中退の権直は？■□■

2018年の日本シリーズで一躍有名になったのが「甲斐キャノン」。鉄砲型が売りものの福岡ソフトバンクホークスの捕手・甲斐拓也は、足が自慢の広島カープの盗塁を6個すべて刺してしまったから、これには私もビックリ！セ・リーグ最下位になってしまった阪神タイガースのファンはもとより、セ・リーグ関係者はすべて「甲斐キャノン」と呼ばれた甲斐選手のすごさに驚かされた。

しかして、本作の主人公は、字こそ違いが同じ呼び名の権直(菅田将暉)。こちらの権は、東京帝国大学数学科で“100年に1人の天才”と呼ばれた数学者で、現在22歳だ。本作は、冒頭のナレーションで、1933(昭和8)年にワシントン海軍軍縮条約を離脱した後に戦艦大和の建造計画が具体化し、戦争に向けてひた進んでいく日本の姿が示される。1941年12月8日の日米開戦時には“不沈戦艦”と呼ばれた戦艦大和は既に完成していたが、なるほど、戦艦大和の建造計画は1933年から始まったわけだ。

山崎監督は本作冒頭に大和の沈没シーンを配置するという冒険をあえてやっている。『男たちの大和/YAMATO』でも当然、大和の沈没シーンはラストのクライマックスに配置されていたが、本作でそれを最初に持ってきたのはなぜ？それは、上映終了後にハッキリわかるはずだから、あなたたちの目でしっかりと。

山崎監督流のCGをたっぷり使った迫力ある戦艦大和の沈没シーンの後、スクリーン上には、なぜか帝大生のはずの権がお座敷に何人もの芸者を総揚げして豪遊しているシーン

が登場する。そのため、同じ料亭で会食していた山本五十六海軍少将（館ひろし）とその上司たる永野修身海軍中將（國村隼）に芸者が回ってこなかったから、山本は頭を下げながら「芸者を回してくれ」と櫓に頼みに行くことに。そんなバカな風景は現実には考えられないが、原作はマンガだからそれもOK？いやいや、こんな偶然からも人は天才を見いだす機会に恵まれるかもしれないから、こんな出会いも大切にしなければ・・・。

■大艦巨砲主義 v s 航空主兵主義。その論点は？議論は？■

日本海軍は、日露戦争の艦隊決戦でロシアのバルチック艦隊を完膚なきまでに叩き潰したことによって艦隊決戦に自信を深めた。そんな成功体験に酔いしれて、今なお大艦巨砲主義を唱えている嶋田繁太郎・海軍少将（橋爪功）と真っ向から対立し、航空主兵主義を唱えているのが山本五十六だ。この対立の構図は有名だが、本作ではそれが、連合艦隊の旗艦であった戦艦長門の後継艦の建造を巨大戦艦にするのか、それとも最新鋭の航空母艦にするのかの対立として描いているから、興味深い。

巨大戦艦の建造推進派として、現実に設計にあたるのが造船中將の平山忠道（田中泯）。彼は架空の人物だが、モデルは実在しているらしい。戦艦長門の後継艦を巡る新型戦艦建造計画会議を指揮するのは海軍大臣の大角岑生（小李克也）だが、会議の進行ぶりを見ると、大角も嶋田も平山を支持しているのがミエミエだから、戦艦建造反対派の山本と永野はどうみても不利。そこで、劣勢を挽回するべく山本が提案したのが、航空母艦建造の予算より巨大戦艦の建造予算が低いことのインチキ性を暴くことだ。巨大な主砲を備え、強固な防御力を持ち、膨大な設備を備えた巨大戦艦の建造費が、平らな飛行甲板だけで済む航空母艦より安い建造費になるなどあり得ない。

それが山本の直感だったが、いかんせん軍艦の設計図やその建造費の明細等はすべて軍の機密だからそのチェックは困難だ。しかし、長門に代わる新型艦をどうするのかは、今後の大艦巨砲主義 v s 航空主兵主義の方向性を決めるものであり、ひいてはそれが日米開戦の引き金になるかもしれない。そう確信している山本は、数字から新型戦艦の建造を阻止、つまり巨大戦艦の建造費見積りのインチキ性を暴くべく、天才数学者・櫓をスカウトすることに・・・。

■戦争が始まるかも？それが2度も殺し文句に！■

100年に一人の天才数学者でも、当時の学生さんは生活のためには家庭教師を。そんな当時の常識どおり、櫓は造船業で急成長を遂げた財閥・尾崎家の令嬢鏡子（浜辺美波）の家庭教師をしていた。しかし、美しいものは何でも計らなければ気が済まない性格の櫓は、眠っていた鏡子の美しい顔を懸命に図っていたところを発見されたから、さあ大変。鏡子は櫓を「先生」と呼んで慕っていたが、2人の仲を怪しんだ両親は櫓への援助を打ち切ったから、櫓は帝大を中退すると共に、こんな国に見切りをつけてアメリカの大学に留

学しようと思決心。先日の料亭での豪遊は、すべてのカネを使い切ってしまうための苦肉の策(?) だったらしい。

樫の人格には疑問を持ちながらもその数学の能力を買った山本は、戦艦建造計画の最終判断を下す「新型戦艦建造計画会議」の場で戦艦建造費見積り額のインチキ性を暴露するために必要な計算をすべて樫に託することに。そのため、自ら樫の下宿を訪れたり、さらにはアメリカ行きの船に乗り込む直前の樫の前に現れて、その任務の重要性を樫に力説。しかし、この国に絶望している樫に対する山本の説得はいくら頑張っても空振りだった。樫の計算では、どう計算しても日本に残ってそんな任務に就くという選択はあり得ないそう。しかし、最後の最後に、山本が「日本は戦争になるかも・・・?」と話を向けると・・・。

もちろん、その可能性は誰もがわかっていて、樫としてもそれは想定外のことだった。とりわけ、樫の計算ではそれはありえないことだった。しかし、海軍の中枢部にいる山本から明からさまにその可能性を指摘され、今回の戦艦建造計画を阻止することがアメリカとの戦争を回避する道に通じると説得されると・・・?

私は山本のこの論法にどこまで説得力があるのかはよくわからないが、本作ではそれと同じ論法が、樫が大里造船の社長、大里清(笑福亭鶴瓶) に対して建造費の資料提出の協力を要請するシークエンスにも登場するので、この論法にしっかり注目したい。なぜなら、結果的に樫も大里もその論法に納得し、以降戦艦建造計画阻止のために全力を傾けることになったのだから。

■数字は美しい! 数字は嘘をつかない! それをどう実感? ■

1981年に大ヒットした『ルビーの指環』の歌手としても有名な寺尾聰が主演した面白い映画が小泉堯史監督の『博士の愛した数式』(06年) だった(『シネマ10』177頁)。そこでは、80分しか記憶が持続しないことを自覚した博士が、年齢、生年月日、身長、体重(?)、結婚記念日、子どもの年などの数字をネタにした会話で、他人との会話をスムーズに進める姿が面白かった。もっとも、数学者との対話がスムーズに進んでも、観客に示される難しい数学的知識が「階乗」のほか、「素数」「自然数」「完全数」「友愛数」などになると、その数字が美しいと実感することは私にはなかなかできなかった。しかし、他方で数学は決して味気ない学問ではないということや、数学における論理性は法学部生や弁護士にも不可欠なことが同作を観てよく分かった。

それと同じように本作でも、美しいものは何でも計りたくなる性格の樫は、美女の顔のサイズから、宇野艦長(小日向文世)の好意で乗船させてもらえた戦艦長門のあらゆるサイズまで巻尺で計っていたが、それって一体何の意味があるの? そう思っていたが、その数字のメモだけで、平山案による新戦艦は戦艦長門の1.3倍と推計した上で、樫が書き始めた戦艦長門の設計図の詳細さ、正確さにビックリ! さらに、やっと大里社長の協力を得られながら会議が明日に変更されたため、資料からの積算ができなくなった樫は、何と鉄

の総使用量から軍艦の建造費を導き出すという、「アルキメデスの原理」も真つ青となる「権の方程式」を生み出すことに成功したからすごい。この方程式を使えば、どの軍艦でも鉄の総使用量さえわかればその建造費を計算することが可能らしい。そんな自信を持って「新型戦艦建造計画会議」に臨んだ権は・・・。

■□■「アルキメデスの原理」ならぬ「権の方程式」とは？■□■

『永遠の0』は主人公・宮部久蔵のエピソードが多いこともあって、導入部からクライマックスに至るまで途切れることなく緊張感が続いたが、本作は前半の「新型戦艦建造計画会議」を巡る海軍上層部の確執や、権の性格、能力を描くエピソードが少し冗長なこともあって緊張感に欠けるきらいがある。権の芸者遊びのエピソードや、彼の付き人となる海軍少尉・田中正二郎（柄本佑）とのエピソード等は思い切って簡略化してもよかったのでは・・・？

本作中盤のハイライトとなる大会議室での議論は迫力満点だが、巨大戦艦の建造反対派 v s 建造推進派のわかり切った論争は聞いていても全然面白くない。また、政治決断を下す最高責任者はあくまで嶋田や山本たちであって、権はいくら有能でも事務担当者にすぎないから、事務担当者がいくら数字を操っても政治決断に口をはさむことはあり得ない。しかし、映画はそれでは面白くないから、山崎監督はこの“数字論争”をトコトン面白く観客に見せてくれるので、それに注目！

数学者は黑板の上に数字や方程式を書き出すのが大好きな人種（？）だが、本作で権が目にも止らぬ早さで黑板に書き殴り始めたのが、「アルキメデスの原理」ならぬ「権の方程式」。ここから新型戦艦建造計画会議は急に面白くなってくる。これこそ、彼がわざわざ大阪の大里社長を訪れているいろいろな資料を見せてもらう中で、やっと考え出した「魔法の方程式」なのだ。さあ、そんな「権の方程式」は、新型戦艦建造計画会議の場でいかなる威力を？

■□■数字上は権の大勝利！ところが結論は？■□■

現実には、ある小さな軍艦の鉄の総使用量を“権の方程式”に“代入”すると、建造費がバッチリ算出。その計算上の数字は現実の数字とピッタリと合致したから、さあ大変だ。嶋田はそれは単なる偶然だと言い張り、別の軍艦での計算を申し出たが、それもピッタリ。こうなると、嶋田はもちろん平山も、巨大戦艦の建造を認めさせるために敢えてインチキな数字の見積りを出したことを認めざるをえないことに。すると、数字上は権の勝利は明らかだから、大角海軍大臣も戦艦建造計画を諦め、空母建造計画に方針転換を？誰もがそう思ったが、そこで「私は確かにウソの見積りを出した」と自白（？）したうえ、その理由を述べる平山造船中將の説得力がすごいから、それに注目！

中国には昔から、「敵を欺くにはまず味方から」との格言があるが、何と平山の真の意図

はそこにあつたらしい。それにしても、建造費の見積りを大幅にごまかし、国家予算を詐取するかのとき“大罪”を犯してまで大日本帝国海軍の平山造船中将が巨大戦艦の建造に固執するのは、一体なぜ？この平山説に対して、事務担当者の權ごときが反論できなかつたのは当然だが、平山説に拍手喝采する嶋田に対して、あれほど犬猿の仲だった山本まで反論できなかつたのは一体なぜ？そうなると、山本の反論もないまま平山説を黙って聞いていた議長の大角岑生海軍大臣の判断が、一旦否決されかかつた戦艦建造説に落ち着いたのは当然だ。かくして、新型戦艦建造計画会議の結論は最新型航空母艦ではなく、新たな巨大戦艦の建造で落ち着くことに！

■●■真の主人公は平山造船中将！彼の発言の重みを確認！■●■

私たちがスクリーン上で観ている限り、新型戦艦建造計画会議の論点は大型巨砲主義 v s 航空主兵主義にあり、その主たる論客は嶋田 v s 山本のように見える。しかし、いったん戦艦建造の結論が下された後、權がさらに平山案による新戦艦の設計に、こんな欠陥あり！あんな欠陥あり！と指摘し、平山がそれを真剣に聞いている姿を見ると、これこそがホントの論点だということがわかってくる。というよりも、新型戦艦建造計画会議はこのような技術的な論点を十分煮詰めた上で政治決断をすべき舞台なのに、この会議ではそれが全然できていなかったことがよくわかる。

本作は、あくまで「数学で戦争を止めようとした男の物語」で、主人公は權直。ところが、この会議の土壇場における平山の姿を見てみると、俄然、本作の主人公は平山のように見えてくる。平山がすごいのは、權から新型戦艦見積りの数字上のごまかしを指摘されると、あっさりそれを認めたこと。しかし、それ以上にすごいのは、数学の天才である權から新戦艦の設計上の不備・欠陥を指摘されると、それを素直に受け入れ、より良い設計にするために權の才能の活用を求めたことだ。新型戦艦建造計画会議での彼の発言のみならず、真の主人公ともいえる平山造船中将の本作ラストの静かなクライマックスにおける発言の重みをしっかり確認したい。

■●■戦艦大和の建造は？權の協力は？山本の対応は？■●■

しかして、導入部から前半部が少し冗長だった本作は、結末に向けて大きなインパクトを与えるシークエンスが連続してくるので、それに注目！その第1は、あの会議からしばらく経ったある日、平山造船中将の部屋に招かれた權が新型戦艦の模型を見せられるシークエンス。数字の美しさから造形物の美しさをよく知っている權は、そこで目の当たりにした新型戦艦の模型の美しさにビックリ！何と美しい！こんな美しいものを是非作ってみたい！權がそう思ったのは当然だが、そこで平山が權に述べる言葉も、大会議室での彼の言葉以上に重大な意味が込められているので、それに注目！そこで、平山ははじめて「この新型戦艦の名前は和だ」と明かさわけだが、その艦名に込められた意味とは？また、

その新型戦艦が生まれながらにして背負うべき宿命とは？

本作は、この平山のセリフの中にこそ、『男たちの大和／＼YAMATO』とは全く異質の「大和もの」の意味が込められていることをしっかり確認したい。樫は新型戦艦の見積りのインチキ性を暴くために、山本の計らいによっていきなり海軍主計少佐に任ぜられ、いやいやながら最も嫌いな海軍軍人になって奮闘したが、新型戦艦建造計画会議では敗北した。しかし、新型戦艦の設計を巡って平山と心が通じ合った後、樫は海軍少佐を継続しようだが、それは一体なぜ？また、スクリーン上では見せられないが、ひょっとして樫はその後、平山の下で戦艦大和の建造に邁進したの？他方、あれほど大艦巨砲主義を嫌い、戦艦大和の建造に反対した山本は、戦艦大和が完成した今、連合艦隊司令長官として旗艦大和の上に立っていたが、その思いは如何に？

戦後74年目の8月15日を迎えようとしている今、本作のラストからそれらの意味をしっかりと考えたい。

■映画はあくまでつくりもの！本物の大和の設計は？■

本作では、樫直を主人公として登場させ、「数学で戦争を止めようとした男の物語」を演出している。したがって、インチキな見積もりを提出してまで、空母ではなく巨大戦艦を建造しようとした大艦巨砲主義者たちを悪者のように扱っているが、後半からクライマックスにかけては、その中心人物であるはずの平山造船中将の存在感が増してくる。

映画はあくまでつくりものだが、本作ラストの戦艦大和の上に立つ山本五十六連合艦隊司令長官の姿はホンモノ。また、戦艦大和が、全長256メートル、排水量6万8200トン、速力27ノット、46センチ3連装砲塔3基という性能で完成したのもホントの話だ。しかし、そのホンモノの戦艦大和はどんなプロセスで設計され、完成したの？それは、つくりものの映画を観てもわかるはずはないが、パンフレットにある「大和の設計—その変遷」を読めばわかるので、これはつくりものの映画の鑑賞と同時に必ず読んでおきたい。

それによると、1933（昭和8）年にワシントン軍縮条約から脱退した後、日本海軍は当時の米国海軍艦を凌駕する「46センチ以上の主砲を搭載した新型戦艦」の建造を構想し、「大和」型戦艦の設計を公式に開始した。しかし、最初期構想の藤本設計案は、動的復元力が不足しているという重大な欠陥が判明したため不採用となり、その後は復元性向上を重視し、主砲を46センチ砲9門に縮小する一方、船体規模を拡大する江崎岩吉造船官案をベースに、新型戦艦が誕生した。それを主導したのが「軍艦設計の神様」と呼ばれた平賀譲造船中将で、本作の平山中将はこの平賀をモデルだ。このようなプロセスで誕生した、世界に誇るべき戦艦大和の建造費は、さて、HOW MUCH・・・？

2019（令和元）年6月15日記